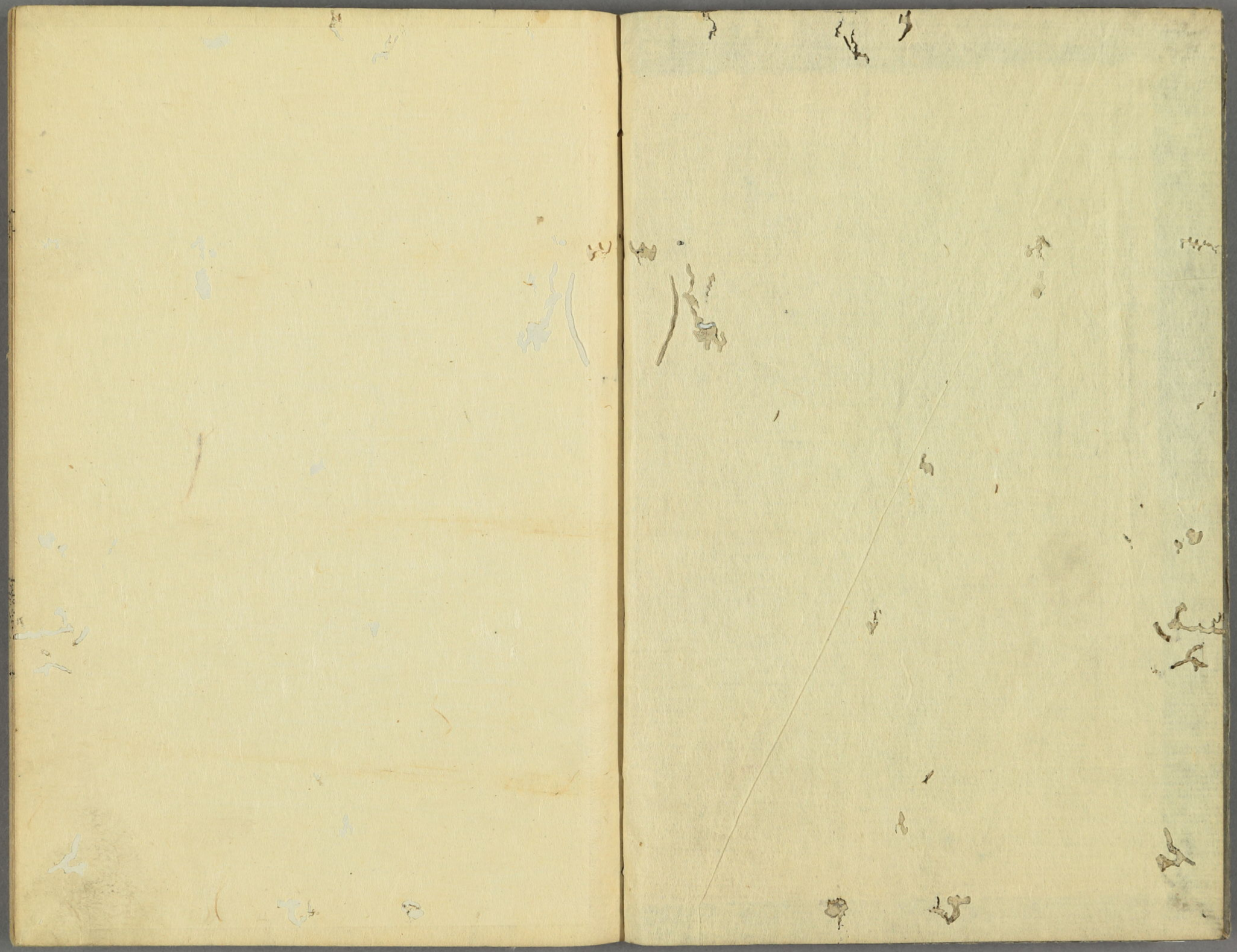
東京考古

亀



早稲田大学文学部図書

五月雨の降埋まて午時さへ
すゝ枕もとの深草の夏の日ふと
目をすゝ枕ハ筑紫へかりゆくかと
枕ハ遠津物語の面影さ
なる物と路の小ちまく旭を屋
婦ゝ塗好紀ものゝ古語ものゝ
なる品ゝ宇佐宮府の瑞籠
真賢木の葉打ゝゝ袖のみち
頃中麓の松浦乃川波雷と見
ゆるもの飛山の一枝ゝ打ゝ音

早稲田大学文学部図書
62.10.30
雲英末雄

[illegible]
[illegible]
羅漢寺　松尾花ろう

旅や淋しき秋の顔はやく咲き乱れ
く自出度しと

唐木乃華

清得舎

中皐月

節句名古屋城の八千坊と称せ
吉備の中山中しく寺後なくもと
り絶して今高坊号とする所の夏人
皐月末の頃舟う後くもくぬひの州
々をもく人多くもくとおもひ出
一万六千坊と合せて出くはの島の初雪
とも面白紀物うこ皇をもく使とて待を祝し
て賜ひ

物仙窟　佳方

隈川や花もさ[illegible]保

車百合

賺 前書略す

見てわ(和)せよ壁の日はた又　薩摩富士　六六齋　莪陵

餞

蓑笠を伴ひて旅すと毎　法橋　泉牙

旅古詩巻

行矣

拾年夏路君ま人ハ　秀鏡

はくくし

餞

白もを葉く苞蕉ふきもれ　舍仙

風かをる葉ふを子里や帆ゝ事船　亀亭

浅漬の瑠璃なす面しをかはすふ　華騮

涼しう袴みうさをかさを旅の空　崔獅

おなし

七夕　袖ふ未央柳社番もすふ　皂央

九月は長九郎の
祭くとの告を守る　危藻齋

撫まゝ山伏山のほやしの那　秋馬

俳出す寂一つまめ玉身　椒　蔭花

仝

五月雨もぬゝ姿乃ゆゝしの那　春巾

仝

健すまりて八千世の夏出給也　如楊

仝　茶出器

立歳や辻ゝはゝ出多情多染　三常菴　御風

苦熱

四畳半孔湯部清ゝ寺の鐘　蔭花

海を斜て夏色尽む雲　舎摔

月涼し四方い山ゝ部飯吹の　春巾

井月ゝ願ケ寺なけかりゝ祭　花

飼ゝ見ゝ亀袴のやゝゝさ　摔

十抱ゝ上孔本ゝ乃むゝ立　巾

元服も御所のさし那出さし　花

小ゝ舩を乗ゝ不弁者　摔

鍛冶夫婦　宗旨別ッてある紙世雨　巾
玄猪かき金山儀乃菊傳し　花
乃思ひ年頃乃松すもや乃葉　接
私ハ七百　年　川乃紫の音　巾
鞠味の衡すを源菊の月　茶
の有を持系菊の借り地へ　接
都人寄こ川ひ所云紫牧　巾
塵乃乃天八く入れ　花
北山を山へ越るのも花乃雪　接
雲是乗待を文おのふ妻　巾

二
昭川はりと夜のあてあき蟄蟲る　巾
表向きハ神のおてを寄　花
裏蘇ぜ川はく聲るあさひ　仝
陽乃徳ハ二月　乃原　接
菜色乃長寿菊のかこ利子　仝
常乃宋以乾ル年貢地の寺　巾
さい川ひ天上乃しとはあ岩　花
接乃家ッく出合勢り色　接
世理巡りの油ぜむうし乃ぜ菊　巾
矢脊の六十ふ國　雪　仝

かゝる罠命之婦とも又さらに　花
別家社者のうちなる阿羅漢　接
お留主番の嫌ひのみをはり書　仝
殺生らくなく棒よりも紅　巾
借り切の九里八丁も皆以痛　濃花
牛酒よひるまゝ従者なる力自　仝
さよりも事外　
かりの馬やたぬきまて河　舎接

漫興

いにしへよりの琴詩酒の美称あり中ハ
詩絵男女ハ盲聾を世の難たる酒
を嘗むる者か若い孫の場合より出盃
危世の品々あ紛と求まする不コツプよ
とゝ世界異国の産と巻世とも文字
しるものゝ法すいろく其用法ハ也ものゝ
むすあし加ゝぬ友ゝ紀と孫ちのく　酌
かゝる編提よ里流しつゝふ瀧滝
ちゝとく三百酌古絵かゝ(き)の河東楼

上唱せられし沈義の云ひ来る風俗の
はのセくちゆ泡ぬふ法ねりあと
おく清ぎふうぎあれし献す青あり 酌
ハ吸もの味は價を紀寿と御しゆ持も
はむ危ハきうさるあと拾十年来

コツプ

一すの滝すし

玉乃丈

金仙

素面うさ

金接道欠の待ぬあり
旅立ぬまふとさま

一葉軒

旅立ぬも、れ楚風雅の土用干 里卜

お去あ至略す

海原く遠の歳りや干の峯 鴫一

今

猿ぬ望ともふ山し雲雀聲 梧風

祇園の菜屋 坂を辨ふとく
ふし一の風待すきかと飄然とし
て杖よ柴大跨ふはもし旅、ぬく
ハ源義亨ふ子と伴る

加はる程まくれや夏の月 村径

餞別

蓮〻ちる〻末まもなき秋順風　降苗

仝

高葉の人ともかなしき身涼し　洞酌亭　司牧

仝

風蓮ちる跡おひ松の名残の那　曾夜炮

送別舟行

西遊千里新離紅海上如猶　云臺

日暮倘雲程自流明月色愛

君舟路過名山

餞別

嬢さん孫も姉〻ひとりぬん素性風　石斧

仝　お玄関

国〻のはち樹や　をしへはえ　金溪

仝

帆をあさ〻ふくる蓮ちる夜さ〻哉　桃甫

仝　香桃舎

花樗やうて志の大路の那　蘭若

仝　春頭亭

行屋は道ふはひこと蓮ちる葉　竹十

餞別　九州へ赴き侯ふを送る

あふを待もちなく蓬る追風哉　梁甫

仝

七暫しちらぬひらぬそ佐渡川　嵐式

前出略

おとさまは八百よろは代や八千歩　呉汀

仝

檜垣やはくしま涼し宿の蚊帳　魚亮

仝

立寄ふをそのまゝ紫や夜の空　乾車

秋興

九月朔日

左海

九月朔日里もとゝも買切る星の橋　只清

二階三階四階海の涼　雄舎

藩菊酒呑の堺の紫醉く　其梁

式日　張乃硯へも潮　清

裏川へ殿様姫の乃ゆ津風　梓

梅〻月と竹の出る海藪　梁

借り下駄のくもり日和吉田坂　清

肥前狗て鷲を上る方　樓

巖物ハ大ふさかしあく　梁
弁当たべけるふもとの鶴　清
友艸の高ひくひくたる寺の孫　接
雨接の寫接と命ずし図両　梁
土佐産くちゝ侍解命を蒙る武士　清
酒屋たとこのうりの人とも　接
吹て見侍花の金亦服の高枝　梁
毛延寿うゝ嘉市め　月　清
呼るも彼岩のうちの孫土侍も　接
あ乃ちものあゝ地をひく細　梁

あさもよし拙殻やしまの浮ひ砂
風をうけくおとに風呂を出る今
石役うゝ是高ゝ少場孔峰の岩
花祖神さ爪の昊質の祖母
愛心をしさも女来有一元川
おのゝ仁侍くゝ二月の瓜
う伊り香も二夜泊りのつくし元
去年生毛ゝ尺の八中
拓愛姫りおしゝ人滝のやるセ寄
松又侍点田　三日　月

清　接　梁　仝　清　仝　接　仝　梁　仝

落蛙とん魚をぬハ雲竹に蛙　清

方丈更く　艶（サヽ）搗刻る音　仝

ウ
ま〻のしこ〻ろ〻こあて弦〻を　仝樗

杖ゑこゝ〻ゆ〻と追うけ出る　蕎梁

確ふ名のすこ〻ゆ〻ふ車　仝

八重むら〻ふ小も赤ゝ蝋燭　只清

新田や君ゝ代の花筆新地　仝樗

馬の耳ふも保川雲風　執筆

梅雨

傘ゝ樗るゝの所晴夏の郭　府中萬霄撰　雞口

冬祝

寒雁るや松ゝ末代清代ゝ色　仝

芽吹吟

花とゝ〻ゝ一家ゝたゝ〻ゝ〻ゝ價の郭　仝草帆亭　天又

雪

ゝ川富ゝ太山府君ゝゝ〻ゝ　仝

清遠屠

春みゝ〻ゝ松の使ゝ一屠ゝ聲　雙峨

親深撫ハ十とせすも過
ぬしの戸風物まて茶ゐを
すゐまもやぬかも四季慰しま
此秋重陽の比松雪を出ゐて
小まて岩まを云打のゝ老人翁
ふもゐゝ比又莫見するゐもゐぬ
初只あふゐ小ゝと云まてを云 伊勢洞津
ゐゝ比おもへハゝ
明ゝ寒ゝ比 完川

此年をのしき秋の日や

神祇表

若竹や所の名社冷ゐ神乃馬 仝

釈教部

摂待や唐戸の浜原朝日ゝ哉 〃

四季

山吹の日和ゐあふのぬさゝ海の南 〃
冷ゝ雨や長ゝ庚して宵の月 〃
鶺鴒ゐ移ゐ書ゐ川淵の東 〃
封切や三井ゝの名月

諸乃春

ひまなく咲て花ゝ絶ぬ　洞津連

見ぬ人のまれなれぬ花そよりの山　牛甫

うの野山奥の院まで

一ぱいハ清山の松の葉のとまるを　仝

三月尽

霊佛も霊社も〻ふれ暮て　仝

蓬扇子意

云号せん菓ゝ〻を乃扇ゝ那　蘭岡

新嘉敷

庄寺や秋さ〻を庭の蓮しる　仝

神祇表

茶畑く時や此日の神さ〻ま　栢支

冬祝

豊年の美ぬさ小袖そ松の雪　仝

春興

茅ぬ花を吟ゝて牛のちまと哉　岳賦

百花

名月や一人ゝ〻ろ刈掠　仝

毛盡

花ハ拍ゝかしくも入日哉　紫文

秋興

此佐ゟ氷ゝ如ゝ月の光　紫文

神祇春

ちらゝゝ ふきゝゝ ゟあてゝ 梅の花　些石

恋無

梯の蓋のゝとゝ ゟあて 流ゝ 柳哉　仝

神祇春

ちらゝぬ名ゟ ゟ の 山の桜も如此　可文

釈教秋

訳名の窓ゟ 向くゝ 黒ハ 月 哉ハ　仝

神祇を祝す

春ゝとゝ ゟ窓ゟ 踏杖や 春乃旅　峨眉山

仝

乗物の土産や 吹ゝ 第ゝ ゟ 童子　砂長

時雨

ちらゝゝ や 石ゟ きハ川く 芦ゟ 葦　戯江

春

訪ゝ の 邨 花ゟ 踏て 屋ゟ 聲　波暁

夏

雲の 峰 向ゝ 拝ゝ 岩ゟ 岳ゟ 面　仝

秋

寒さ寒さ起居の里もあるさ哉　波曉

冬

粉ふや姉妹の松よりの雪　仝

八千坊主人呈揮毫の三月庭花を送りて祝す

伺しの四季の外かるもなし　浪華　宗信　完川

更衣

素を捨てるふの口切の茶も夏　皇都　文石

冬祝

清神鄕や老の鏡を磨き来て　東　八山

歌仙

半時庵獸噬

春日一夕こゝろみる連句

と川こゝろ

春やゆく枝春川とはる春し梅の花

凍解穿氣堅　うゝく魚

帆を憎み岡を少し流れも春の色

物憂好乃　内へ鼻　以紀

春の影と花のひゝ徐ら月社鶯

腹すゝ海こゝを行て春暮る

空(ウ)舟一乃多丹乗海尓生
ゑを川うそひ栢榴ゆゑみ
借るる風のたりと知大津え
濁ハ三河すゑを　巡礼
素流し　極(鼓)
勿辞なるさふ　袴着く惣
枯るる柳たすきの身
膳出す使しまなの関
岩角を下る鉄砲の引かちを
裏なるき厨　内ゆ形く旅

るを使きて花る身を強く雨乃牛
森結んく砥を摺るらこの
下総を志もつるさとゆふ甥も　高尾
鳴蟬池の庭り　蛾乃巣
さとはりやさりとて八幡を化志沼
今まて志ゆ十ヲ内ゆ指
鉢日さす閑院　御所ゑ小松原
国も偽めゆ原顔く茶ゆ
野かくすゑ浦原邪ニを玉霰
酸て洗行乃たく三味線

ち畫す百花畠乃いなひかり

二上武庫山まゝ〳〵と到

公事待〳〵庶る舳先よ鮫の竿

秋牡乃荷を棹ふ冷ふ馬

やゆ（ウ）りさし出るこの夫

奈良すま迎ひ雲よ入海一色老

以後〳〵乃名所盡〳〵はゆ〳〵

書ふハひさ（錺鈕）てを打すたゝ老

合唱ふ轍ゝ傳ふ荷乃花

晴雨晴れ乃雪訴〳〵の系拍ふ

今接る人のの初乃詠よ後に　在摂作兵

源しさの初乃ゆ湯むゆ〳〵川　青千

思し吉備、下の御山地よ種ひ
そゝ筑紫、り詠の初乃ゆ合せ
御庵ゆ出必京方、と繋て

難波津やあしもかるゝ夜の旅　備福山　森々

鄙ゆ再会ハ稀にて　在摂豊後香下　露橋

差相蓋ふ　あ〳〵をやゝ空

沿義亭のの見り詠の
むゆのゝ多むゆ

七十五史　輕羅

福德の言の数ゆ夢
さゝ〳〵舟

鹽

鉄線に花くしき菊紫旅　胡條

八千坊の法師古人の履を尋ひ
九州の行脚すがらしを続して

埋くまり乃埋ぬ所多百合　馬周

仝　歌多略

去年新蕎やけり結ぶ不老眼境　寒松

仝

道口寄る石菖浪義の古あり梅　雷車

仝

藻刈舟やせるの浦乃旅硯　琦行

俳諧　各前書畧

玉苗や豊の穂波乃門出の邨　岫人

日乃出やはるしも国し　和の花　素丸

這さるふ蕾しかるよの花あ月　公連

はの庵の園を去るふ

秋の入保寄　社わるや青田時　仝

俳諧

帆もナ分乃ふとくさる苗うく　魚竜

仝　歌略

世乃ふ入祝すし　身乃ち邨　蘆水

飛驒川にて節を入りきしに
シマまあんす
廣く啼き夏兒竹のかり出猶も　左海　只清

銕翁
九萬里も廣まき飛ぶ鳳の夢　仝　捨來
涼茂亭主人ハ再ひ西海又ハ
越の月見んとて扶川に立ふハ三年
皐月の末と号ゆに銕翁しる

そゝきぬや白川天参の月弘節　泉州尾嵜　餃花亭　嘯志

銕翁
棲處も秋の唱頭を田み乃笠　仝　對鷗舎　臥石
先生此路にまよひて市中の
扉を叩くことをおもふ

毛をそのへく末社探しの挑出の舟　仝

贐
真藝枝をいのちの婦く語哉　仝　移笛堂　射石

仝　予書略
御川出て衛るかる厳風の絶　仝　自凹
今色人西洋へおもむきけふと聞て
蕉翁のむかしこひ出られ

さらさら貝捨ひ涼しまん公のゆかさ　南都　石鯨

銕翁　二章来出何り略す
雲清し夏の森林此　あそひ　浪華　格川

涼しさや八千代を節に箕裘不二　百鈴

送別　名倉氏主於帰あ里賀之

玉ほこの道ぞ船祥神の加護　文格
むあふきれよきを晴らしの雲払　東弘
雅子富や九ヶ國くを車百合　舊尾

仝

戻路ハみち、川飯や旅志徳も　禹巾
飛棋の凡ぞすぬ旅の心な兆里う糸　栾丈
世る乃を待川をに乙速る雲の峰　魏江

仝

香をぞめんおも九重をとりれ実　石魚

記りの志遠き里も花ぞ麒麟草　夏鹿
涼しさあ筆鄙の美やこれ旅居古衣　貫丈
風義う遠き里て不案の酒高く　一壷
志はらくの別を月出るし土用干　亀祐

狂哥

なを慕ふさく旅八飛や梅さくら
やうて見てよ法師を雲　仝

贈別

一わりく旅路きよめや初夕立　宇山
西へ歩りめ東風まち土用の盛り枝　里桑
旅志徳も冬つくし浦の涼しかな　雅牧
待をく世る乃を枳殻の花れ土産　分外

鹽釜穆豊ほとゝし、
おもむくをそる

刈萱の関路をそなたの日ます者うゑ　竹秋

雪山あるきすてゝの白流しくみはくさを
ゑび茅ゝりうゝの色り矢ハ徒よ八千坊あてハ

えんほうゝ風うゝ侍や　歌　夏ま祈芝ゑ　修古

餅ゑ　前出略す

合歓ゝ花巻ゑをもさまを百合の芯　皇都　摶辰

仝

夜の月　帰里をまゝ川や後の月　仝　朱花

新里を出しを旅立勇気美しく
を侍う迄も唐さまをも又結すゑと

暑さ日をゝうゝ如ゝ明り帆うゝ市船　几山

道喜粽の頃

心侍をの侍ゝ対めや者ゝむ日毎ゝ待て侍然
をゝうゝさめをゝ里しゝ里かいゝをゝ様ゝの甲蟹
あうゝ今ゝ侍ゝ長ゝ赤ゝの面目とゝうゝ侍ゝ
門とゝうゝも有ゝ事ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
楚の国ゝ里ゝ茅ゝを献せ侍ゝ例ゝ侍ゝ茅ゝ者ゝの
名ゝお里ゝ出ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
もゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
邯鄲の亀ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
伝玉蟲ゝ消ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ

白も屈原か行吟の高く峯迄及千も
小笹のいさゝかも靡さゝすし其徳ㇾ云衆素
雪乃肌よ清きまゝあ志ゟ豊寒かゝほ
ゑとゝより九夏三伏の夜ニ錫七度何処
あ笹の葉陰の氷室といひ出しもむ
へなる騒しき隠逸なる境あれて地
謀り日本一乃香泰のかくはおり本邦
ちゃ名に嵩深あに亭ことし高独
立て家の枝葉立かく法を成般く飛
と川に縦つ麩民の竈よ来出く

おくは信云猪も無てても寿ちさるへきも
何くぬけ愛茶く云詠人の園に採揚く
出すりくかくれあり世ハ天にすき何をも
以けむ印孫よいちなるく取ハ藐姑射の
山るに般妻ニ子判

千代も讃るとも
春のまゝく千條ニ卿
文肯舎修古
撰之

渓流大堰川を拾ふ　皇都

川を紅葉ながら流れ来る　搏辰

五条坂の独歩一声感あり

古寺や四八の鐘の響き　仝

二月

手向足雛波乗り井あ海乃河　仝

初冬

口塩乃しく色ゆ拾くや若狭浦　仝

初雪

空ゆ来ぬ花の初音ぞ花見哉　仝

哥仙細流

皇都

腰うけて水もあるまりの涼しく床　搏辰

日あて鳴り返し笠ゆさすり紙　含樗

おもしろ拾ひの森の狭間ゆ出て　旭川

壷とりあ宮のよく仙台ゆ　蘭月

物ゆ宮の年ゆ世日　身　弄朝

尻たもしくと相乃一葉　辰

供先ゆ猪手出もゆ里　含樗

二藤あ川ゆく由緒ゆき　川

はなさしまみ乃立派なまの色　月
永き日数昭あ後乃彩酒　彩
乃笛ゑ和り解り下海たち　辰
ゆめ〳〵しまし念佛ま童　樓
年のゆる孤美う成彩山の　川
四年ま毋き安藝殿の紋　之
ゆ谷の系藤ま出ま葉門　彩
玄猪餅つく三日月ゑ下　辰
使者参者たうひま花の毋簑　月
技の〳〵えさへ松の密談　組

名魚茶の乗　逗ゑ　左りハ二は　彩　川
ま月き　かこひ清海堅拙ひま　樓
九族も　おく〳〵天ま藤ま　辰
君ハ去〳〵保や姫ハ〳〵の号　之
春ゆま毋　出弟原源山独活　彩
ゑ行も　ゆ〳〵なる　む馬蜂　川
を乙〳〵の事弥生の濱り　秩父笹　樓
樓ハ下りて　使童　ゑ〳〵　吉吟　辰
松ハ世をま　ゆ孫し　ゆ名　正和　月
葵ハまは〳〵　ゆ毋　ゆ〳〵毋の月　川

無理風まとまる乱れ出る如き紅葉　朝樓

おちゆきし袖へ入りこまる世耳

梓もうゆて起たるのむ中きて　樽辰

海を眺めく出来る如　献立　蒙月

上人の島社かくしまやしき　旭川

温石よりかかる節保　番頭　舞朝

玉盤の乾のぬくみ多く花は咲　舍樽

酢をも高ふ喜毎乃峯　扶華

四季發句春

派義江と梅の香まる夜舟うた　姫府連中　秋橋堂　亀齢

布浦ふ世も流しん名の名郷　紀文

ぬ月春梅は雪吹や笛乃聲　鷺東橋　玄人

北窓もひはあの一もの花　光昌堂　青々

閣を漕梅のちらしや梅乃茶　青海

題石梅

春ふかゆ山ふ式部梅は花　紀文

ゆ渡新海龍の傳や春の雨　今

ゆ〆保ちうゝ風は柳うらま　今

夏

葉桜や[illegible]馬[illegible]あるじ哉　紀文

[illegible]　亀齢

風[illegible]や　閑居の窓の栗の実　桑原洞泊舟

[illegible]舟や[illegible]漕し夕すゝ美　青々

[illegible]や　祇園乃夕蛍々　亀齢

苦熱

端車さゝぬ夢語は暑さ哉　紀文

秋

中小川[illegible]澄や星の妹背山　仝

風の秋稲は蕾形　芭蕉

[illegible]　青々

[illegible]の屋[illegible]　仝

[illegible]寺や虫の聲　亀齢

冬

[illegible]や稍冬ゆくの音　青海

[illegible]何とゝ[illegible]日の[illegible]　亀齢

湖水眺望

松ハ[illegible]澄[illegible]ぬ夕時雨　紀文

[illegible]の[illegible]琵琶の音　吟春堂隨柳

振向ハ本[illegible]皆[illegible]し[illegible]牡丹　市水

船すゝ[illegible]ゝ[illegible]や むらゝちとせ　金花堂　十卜

風さえるまの松乃すゝとの邨　還海亭　千鯨

本のゝしや 拙太郎坊 次良坊　南嶺舎　鷲行

神祇雪

神垣や地すゝ[illegible]しの明ぬ雪　亀齢

寒夜吟

鉦すゝく 祈をゝく念佛ゝ　紀文

松風ハすゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ寒さ哉　静歩斎　二硯

傾城画讃

定すゝ[illegible]ゝ 抱捕すゝ[illegible]ゝ　紀文

哥僊

雪あゝ[illegible]ゝ 雪ゝ[illegible]ゝ 匂ゝ[illegible]ゝ 松乃花　備前西大寺　犧城

簫もかゝくおゝとかゝ妻　舎梼

志かゝゝ[illegible]ゝ 御殿の[illegible]ゝ　佳方

ひやせん[illegible]ゝ　仝

碁ゝ傍ゝ田舎ゝ[illegible]ゝ　塚堵

湖とゝ[illegible]ゝ　仝

夢のゝ小原ゝ乃富ゝ　佳才

甲賀伊賀京ゝ飯綱　お者　仝

たかき顔神ハうあすも氏祭り　埃城
宮宮うぢの引とめぬ葦　仝
柴と塩皆て去こまたよ小荷　沈馬　佳方
猪口も社そ社社ぬりき　祥瑞　仝
一あ〻し孔子多里の牛なます　悌雄
以たての岡ち逆うまき稜　仝
安金ま僊多ぬ法螺社山乃月　佳才
唖のやま船里も去ばく〻の唖　仝
御符あうぬ時ゆ〻ら〻を那の水　悌雄
響ま去川おし紀窓のほ戸音　佳才

名
嘉乃戸唄や四うぬ法うれも　仝
岸社印ふに孤を干すえ拾　悌城
ざんささ〻ふと鞠の芦社多志五　〃
なも河まん〻く傳〻山茶ま花　〃
押つるきやつと言く鶏の奇　佳才
逢ふ度毎ま寸ほ川せ川うた　〃
釘うぬ法蕉ま左なしの木うぬしの木　悌雄
昭日塀雨ま寸　頭痛きんこん　〃
抱篭ま鶏綿ま海をかまくぬけ糸　佳才
罠乃杖ぬくゆふ白社垣　〃

植乃尾や杉のさを原乃乃　蜂雄

塩ほくはしのさゝひやゝ　〃

屆くるふ所ゆたよる温泉揚も　佳才

日のゝくゝ西ほ菊遠ゝ　蟻城

あさはうなる風の湯ひし恋の笠　〃

野風を吹くむうひ侍乃笠　〃

蒸法の花を酢の中の音　佳方

代くゝふ代法本とうゝひ納める　桃葉

軌地輪能毒論

上古神農氏百卉嘗くみてかはゝ角六さらも

角寶本草ゝ中ゝんゝ車糖乃切用を攀ゝ其

性味ゝ苦ゝ寒ゝ氣ゝ薄ゝ一稍あるこゝふ一稍あるこゝを弗茂

軌地輪といふ異名して逸散軌ゝよゝ考ゝ大熱

物ゝ毒ゝ毒あゝ嘗乃ゝ其味ゝ苦ゝ名

ゝ俗間ゝ狡猾茂だゝぢゝ蜘ゝとゝふこゝ大熱物

ゝ毒ハ多ゝ軌乃文ゝあゝるゝのゝ

修法ゝ曰飛ゝ樓艦の樓ゝ顯ゝ顯山也義飾ゝ

鈴繡ゝ纏ゝ也ゝ定ハ定ゝ雉乃山棚のゝ

あれこもめく事ありて大坂へ六月より採用の伝度
を設くべしとの沙汰もあるべしの鉦太鼓を佐々木挺
使と申制裁する陳任使を加えられた徒、宝を持
故手小晦日月よりそむ怪をへ一人をして必喧嘩を
為すも不知の者八酒製ふさる事あるを太甚忌
へ一遂使を以て逆気を生じ冷々西瓜を喜み
かち搗を裏る宿老屢よるー利害者を以て
又曰ヒヤロ〻喚は軽〻あ作き風を記ーヨフタリ
〻操を仕く裏雷を以すを以て塵坊を為し
土石を穿ゆえん轍手跋を以て[illegible]坂

を弱り人を強るの事貪婪の搗ふ施す所を
陥下の搗あを鋼負の奥の搗ふ近代ては大手
當ぶ〻いを〻ふ甚能ハ如何ニ些ふ神事
此度土を宮無ーー難劇師部盧戦を
活業を助るのみ嗟吾その多毒少能害。
功より甚ーを記を以て中頃孫内氏乃
足寄ふ〻手ハ法をふる此業をそえしも
今を屋の青ふ此のこ独を近世これを小方
ふたくみ摸ーーを制裁法を同ーーを以
あまま児蛇地轍を鋼を高を家購得て

黄口の流味とかし專ら唖醫の門よりそそ
良否を擇ひ出車前子といふもの是乎 和名
とおゝ乳母子と佐奈加ちへこれ毒ふも
葉よりそ初ては平ものゝ如くいりんでこれを拔
くやうに人の性をかし一温ものゝ如くいちんをみ
出すなり

「騷」

祝融の神すゝ美

應證坊 分外逸之

題春雨

第ゝ京原枕やゝ以里川妻の雨 豊前水竹 義龍閣 孤鴻

初秋

岸の松鶏ハ〻鳴しを好の秋 風押舎 鴉森

晩夏

松坂の松とまちを度やゝ夏 嶺雲館 此夕

時く乾く硯よ秋地きゝめ紙く 舎樗

大暑

傾城やうつり君ゝ事如平ゝ秋暑 仝

春興　二章　　備前　西大寺　蟻城

さゝし橋白みゆる春の風
有明とゆく人ぞうしろ　梅の花　仝

短夜

思ひもよらぬ夢の命哉　砂雲　仝

六朔

涼しさ面白し阿川さ晴る雨　仝

七夕

星ぞ見せさゝ舟と鵲の白羽　仝

重九

相を抱く一輪を崩の岩白の邨　仝

後月雲天

熊をうつ人ぞ船あり　山二夜　仝

高野奥の院

思ひ出も高野の深山　移り車　仝

時雨

日は袖の乾すの深や小時雨　仝

夏月

能因は都を出て少しの月　仝

鶏の鳴さゝのうしろ白の風の末の邨　佳方

神祇春

梅吟や祖母も母とも神の旅　竹鳥　南紀和哥山

寄扇戀

恋かなと如也書りなれ井や手の音　仝

新茶能

なつ山ちゝの太鼓よ戦く緑風雲　仝

冬祝

名を時やこゝ日三ヶ所の花集め　仝

伊勢花

音羽なる日もなつ如ぬるや枝乃春　富天

市屋しの雪月源茂亭坊

志ゝぬ飛ゝ知るすしあゝく

一ぱゝさぬ雅鞠ひ咲き於すき

山伏加奇く伊花の嶺しき

教く告おゝ事新比みと

年慧風月東事誠ゝ岩松

せん風来吟　南紀

時鳥ゝ聲ゝ　雲ゝ月ゝの邪　白貴

何所ゝ知ぬ春ゝく旅ゝ

八幡巻八千代坊ゝ

八千坊を枝まつりて法師
植え初めし枝の法師の異邦に八
五十年ばかりに八十年まで家郷国土
はさまざまを形しは国土の君の恵
を一時にまつもまた君の代のいと
ひうとに神あり高貴のたちあた
りしの物まてもまたまして年月
枝の片腕を貴び江高砂の根
幸崎の枝くも枝くの遊樹の業
毎のみをを増し老ハ更なるまうあ

を樹の枝も邪の色深のれ都鄙
如不等しとは地或ハ舞天は指くもうひ
を所樹木枝長短の距法の法
正しなるや世ろ意枝なる量根を
しなる白を精ひ奥の考法を漕分
須磨のく紀業をくりすもの接くく
彼山焼ろ山矢ろをまなくてやハ有しさか
る酒裏の無姫をふ小夜天原あ
足ちかくまを船め吟る大をまくひ猿
をしもまハさ屑くの戯を拙ひさもかくく

しき竈の神れ願を解とゝや今ゝの鄧
林伯俞この孝都藍ゝ仙術芳郎の指と殘
るしも寄ある哉播太郎ハ勤寧孝乃
紹又八千坊と号し長壽自然の一助を添
藏亭の主儀ゝ游て遊くしの紙ゝ僕ゝも
此岳を百里し順路寒歩ゝ粧友の句を
乞て一集成ゝ也ゝ庵さくしをの徳を博く
ゝも寄ぬちゝ也の返ハ通照ゝ歌ゝて搗臼
おのゝ孫ゝ為ゝ

南紀　知友述

行脚を賀す

速前都比峠とたひをや　鉄線花　南紀若山　東戸

飯盛

美仁を馬ゝ乞けやゝ蔵ゝ富士　仝　宜春

仝名古屋

帆ゝ神の吟やぬくゝ行ゝ道明寺　仝　竹息

法ゝなくゝ住て見ん海雲の栄ゝ時　沂風

神ゝ清ゝ袖もすゝしき首金武　甫玉

日ゝ命ゝ養もみちの美ゝ之の那　三力

十かゝゝ月をかなゝすゝ而藤の深みゝ之　一亭

餞別

以巷あく空も九曜の五月たち　南紀岩山　里白

仝

接宗道九月沢山を告ぐ侍
まろ〳〵聖童もろかえし餞に
至健なるもの生世造化なる事　仝

今朝〳〵扇呼いて首途の郎　午枕菴　大林多

道すがらの吟情をおもふ

直顔も木槿や松のあ石社杖　仝

西くの俳流よんなとめ結ひを

海るやまるよ神ふひらを地集衣　仝

被下園言

秋の夜北長を照し燈灯は酬所しを
乃数月指折うゑ嘘の雑るを興す侍
杉のう一道の趣人事茅屋は止居して
松ふし食は園匂ふ主人空腹却て語
主八客鼻聲言ふ言葉ふ主人曰謙の字
あ是俳社字あ客論す原人あり論せぬ人
何利必何ン客曰理を捨る主風人とふ
主人曰屈居を移て雅を雅人と云云客曰駿

河を原旭を冷んず主人曰大小路の境を喘ぎ
碎人客曰物中を溯洄を論ずて大船を
通ずる何の苦を知らんず主人曰見性成
佛と感ず客曰教外別傳と笑ふ主人曰東
坡ら笠八笑百年の雪よりも如き客曰雪太
白八月の音を樂ぶ月の光りを代乃
流り移す主人曰不倦境あり八侯芭を後
世あるを恐し今ふ面乃説あるをかれ
主人曰鐵面皮と賭ゆ〻く耳ゆ笑ふ客
主曰嗚呼夜ゆ〻く拳の雀も呼人鈍飯いの耳

通題四章　南紀稀蓋長者

神祇春　里白記

誠を表廉徳ゆ〻く春ゆ影　里白

嘉の扁嘉

論社神風ふ蓋ゆ高　仝

釋教社

世ゆ所りとさゆ〻る観音所の法　仝

冬祝

雪のひや多しうふ当さ塩の穿　里白

素無

素ひを素と見せ風柳の車　仝

納涼　市中吟

番椒赤迄も民竹青ひし　仝

良夜　清先

ちらくや庭ゐはいまの四方の月　仝

小春　徐歩

紫苑もかれ残ふや花乃色　仝

冬の吟

鶉川の秋や　和哥山　宜春

寒さ　戸　難瀬

村　雨

豊年

茂る稲穂や

近江湖畔

高山

和哥山　東戸

山路の吟

南紀和哥山

霜まゝこの精まう猫　岩間菊　知友

紅日まぬまく椎茸〻袖　舎樗

菌仮月の友達なる〻秋くゝ　冨天

棟上ケまてゝ根太張る　友

荇蕭を竹く拾りし雨跡　樗

ゝの京一枝もなふれ竹稿　丁

楽ウ形のお当主ちりのだはりこ　友

武者の小路ゆきゝくゝ方青　樗

恥ちゝはゝ皐月の桂さりとてハ　て
長根長社止ム湯泉の切　みな
誌料程そのみあるもハ不屋ゝ　樓
鼻本恥さゝ志ゝ志ゝ行　て
蒼井ふも女見ぬ日ハあるゝ　友
延変ふ延し　かくて飽て　樓
佛法ふたゝしそ侍まし崇り神　て
孫と孫とゝ　鬱て大汗　友
生筍の都うゝ　ゝも花乃月　樓
詩を見し歌よ世葉の出る　集　天

名
献ちを破つゝく　邪法をやひ船　友
うゝやまれ　雲ゝ　藏　樓
式日ゝ接をたゝやさぬ松ゝハ　樓
屋の爭をのをかけゝ上　て
我岩ハ竹跡さ風と瓦あゝせ　て
垢流し　今ふ雪の孔ど　友
百韓の芝　社ゝ　抱て森法　樓
月ゝゝふ　ゝ重昆殿の三寸　樓
新田狩結をあハ　ひたまやゝ　樓
鬱と一面ゝ　ゝ　ゝ

国恩とおもいしられ　野雪隠　天
志ろと咲うめもとゆきの梅　丶
ほけ屋ケ十墳信ゝ　志の癖　全樓
責馬をとる　拵ふ事等　知友
貝の珠簾をもろ世の宝りの　仝
神をハ坊主ゝ　誇ゝ境内　全樓
咲ちく花ゝ二本の中書ゝ　富天
ゝちまる車走あさ紀之　机等

二忠辯

功ゝ能ゝ仁形ゝ心ゝ配ゝ右ゝ一事
あ事ゝ為ゝ鉢ゝ成隠ゝ化ゝ防ゝ
ゝ成ゝ海ゝ安ゝ久蘭ゝ乃ゝ知ゝ
ふゝ義辯ゝ成ゝ花ゝ吸ゝ拵ゝ
酒ゝ其十年の滴ゝ蜜ゝ水ゝ丑ゝ勝ゝ
やゝ百ゝ葉ゝ和ゝ不飢ゝ
表ゝ緑ゝ能ゝ保ゝ齢ゝ延ゝ兼ゝ
ゝ為ゝ穀ゝ為ゝ四海

中瀧川左ハ白屑ノ如き谷あり終日
棚ヲ開キ口自息たゝしく井ゐ
くゝ仁義を守り勇武
金中ハ没して長く功を立へ其名
四海ニ輝くむ神風やいもかし
こき市もくゝ志賀川ノ流れたへ
ちゝ同ゝ力武定め殿いし君臣の
祝を整ふ或ハ文武を懸ル操ハ
楽ふくは緑海の恵を空しかるん
夜ハ重欲日乃餘事雲ちゝ

ゑしゝ玉ノ如き舞ノのかさしを天地を
向誰ニ恵みを懸ル如食を斷日
あ足住ハ栗ちゝ重厚を第ふて

若山
完爾菴
一亭

蟬　蜩

こゝしゝ玉ノ如
一ノ音ハ

或日熊野ノ方ハ蔦ノ紅して
彼二物の紫を見百ハ
感しゝたひ住て多功ち

敷ふ夫俱に旅行の便を
年ゆかを八ゝ坊の乃郷茂
墓し章同句乃句章を
乞ふ求ゑよて示ス

追加一句を賜ふ

産業や　　吳郷子

晴ゝ乃ゝ
巻ゝ葉

神祇恵

本源四季の雨ゝそゝぬ　諸の徒来哉　和哥山　三カ

家扇恵

多ゝ恵涼し扶ゝとゝ人もう邨　仝

釋教秋

明菓涼恵をしゝさゝゝゝ磬の音　仝

冬祝

飽ゝぬ長老つゝの恵しや三ッの花　仝

春雨

粗笑ふ蚊のふ物ゝまや雨乃糸　仝

延潮

姥松の陰もしけり夏の川　三カ

更衣

夏とりの片輪ぐるまや花の紬　仝

夏日

小ぼうくく草ゐ海の底哉　仝

蒐祭

多てのて森ぬ枕屏風や魂まつり　仝

秋情

稲妻やわるもあるの鶴のさし気　仝

時雨　二章

壁ぬしの鼾ハやむ川一しぐれ　仝

後まさと鳥ハ求ま極く時雨哉　仝

春宵　二章

冷及

明燈ちらふ振ツくく海くらの鄙　楚客

菖の葉といふ狐歯もきくく蚊　仝

蔦花

訪くくしき神の友ぐち花ぬ蕊　舎梓

荘子画

蒼ゐ蒼を蛙ものゝ蛙ものや蛙　佳方

抜糸

[illegible]　左海

池上　只清

酌すてもうゑもの雨の蓮　仝

宿山寺

庫裏し炎会拾ふ為ハ岩ゐ如　仝

一句詠し瀑布ゑ完ぬ　仝

端午　郊外吟　岸和田

刈菖蒲ゑ[illegible]自歩ぬき菖蒲哉　雙峨山

深夏亭詞望乃

俳集を賀ふ事

泉南熊取

香鶴庵

百遠

四方ゑ敷く風ハ秋清し

芭蕉乃笠

春興

風ゑ[illegible]深夏峰ゑ

琴柱の音　仝

深茂亭詞義乃
編集を賀して

薺飛ろけ日こゝけはゆゑん道花苗　東南 淡々舎 荷鎮

元夜

千金の廿出しはしるや宵篭　仝

露

音もなくかゝ勝く（彭）清し枝乃露　仝

歌仙

南都

先つ春へきぬ六ちりく蔵寺　石鯨
一ッ森と遠る雨茂きかむむ（箏）　舎拷
御次乃間喜襟折鷹品さしく　梅貫
鼓より二人メまつりん　斧三
月の枝それも柏ちさちくの　梅丹
ウ
古とし遊ようら葉る露　武條
箕面寺乃手ゑゑゑれぬ鵜鶺　緩駕
杉く蓍さし朱　槐朱杉敷　梅驪

出来る限性如さ記ち度あるべん　鴨東
京ゑ〻かゝまを志のし路　菅入
一時雨小唄ゝ係ゝ頼うむ　振鷺
職人そろあれ事鶴を書　吏洞
かゝそあ如鶴（ろかゝ逸　墨
半面（掃寺は　雄の月文ケ　執筆
馴来つる秋ろ暑さ下ちのま　詩集
伊賀先青以も金ゝ如我　石録
花ゐ素人の嫁入ろ人はゝ　武條
そしら如ゝ墓ふ　梅要

絵ろろある大工ゐ笑ゝ　梅逸
古墓市寺船鳥帽子　振警
重川ゝ亀も掘ろ非ゝ寺　吏洞
松葉北上ゝ川　梅逸
紙雑も質ゝつゝ著角集　著入
猿ゝ孤鐵ゝ来月ろ事　梅月
留ゑつゝ頭ゝよくらゐ美　石録
一ゝ勢侍徒屋ゝ通し　梅駅
萩咲ゝあゝ屋かゝ花ゝ　楳月
松露戎先ゝ様ゝ　塔来

俗物めはなを鋼荷の月々雪　掘路
廣東ら帆の見ゆる霧　緑奮
楠（ウ）茂屋を引繋巡る　細ふる　梅戸
濱を損ふ下地ふら　玉條
之代を西之条ら事ある如　菅入
に上さ〳〵　牛　馬　東洞
初花の咲ぬ玉まのお床ル　博　茅三
去冬かあるに参ら冬井戸　牧蕉

春雪　巴鮑菴

撲踏ら初茂ら家如　北国ら通　石鯨
短夜
一夏ふみしかくも石寺夜　伽茶　全
塚無
嵯峨ら見春暮足む乃春　全
冬日
嵯峨ら　あそぶ
空小春夜色北こ教い古寺　院　全

初しぐれ

はつしぐれ　世　まこゝろ　なるみち

浪華　冨雄

天満神へ祈願かなふまくも奉納獨二句

[illegible]十一日東のかた[illegible]

此より深浦しゝ文墨へ[illegible]冨佳友宗[illegible]

遠く来りて越[illegible]

ら出し[illegible]の句ゝ是非ふく[illegible]神もおらもあるを

少々暮る迄よく教みちゝ[illegible]

同門り好せより各一章或ハ生花偏挑ふし

取添へ遠ゝ[illegible]佳作[illegible]

を本意ふ[illegible]

爰ゝ出[illegible]人り[illegible]

奉納　二章

初花やゝ秋蒙照　星之[illegible]

坪ふ[illegible]言り美枝のかゝ[illegible]

倉椿

賀奉納獨二千句

天命の二千代餘る巻尾月　嶼洞

二千里の水源しくてゆくさきた　舎仙

賀　各巻重あて暑まず

是歳命の花にせん白扇ちらけ　皇央

手水鉢の水源しく神へ土産ゑ　春巾

持参の白手隈もふ一夏の月　菱花

四道の蒼木ふ巻　深見子　市風

朽如名乃さちふへくはり如二ゑ石　分外

松の葉よちりふち山巻雲舟巻　岫人

ふくまハ白白毎てゑ々の雲車　文格

二段の糸も多世　塔巻巻巻ふ　字山

道源しゑ日かへ巻ちきふ帰　雷車

ちゑんと引も餅力欲矢つき早　謝大

生去めゑゑ世ちゑ乃如ゑあゑ　東弘

世ゑ実如梅乃ゑ巻ゑ二ゑゑ　石臭

千世乃ゑ名も高砂や　女夫松　胡條

ゑゑの返むす一源しゑ二ゑら　秀鏡

賀章

千々潮なるて留貴よ水こて　佳方
口指ゑ指〳〵千百ぬ千ぬ　たゝり蚊　吟十
うつる新樹をゑ世の二見砌　蘭若
日和ゑ二ゑ爽ゑ戸樋や冨美くさ　蘆水
丁と三千てまり此花の松ゑこの軍　百鈴
八ゑ坊二せん一ゑ　筆　ちゝ程ゑく実　乾車
新さ〳〵しゝゑ冨ゑ

言葉やこ千翁　冨天

初雪

そし雪も何〳〵ハ紅り白ゑ枝の雪　佳方
濵〳〵後なゝく鐘さ埋る里　舎梓
冨つゝむもさすの侍不都合て　仝
思案の外よ冨ふ雀あ邨　佳方
夏も未タ十日よ足〳〵ぬ畑の月　舎梓
進物乃数〳〵くゝの涼しさ　佳方
仏助塚も嘲さちゝ原砂ゆこ里　仝
冬迄ゑ未ませハ北〳〵行さ冬壁　仝

寄うゝ等分一下夜若庇も出羽　舍樓

まと井胴上の風まさ如松　仝

昔年は懸餅かん他意なき　秀鏡

ちゝ爲くゝと初霜り見れば　仝

茶の巻の盛り加糊ゆ雲れ月　佳方

在セ太鼓もこ者居山りと　仝

神さ爲は庖廚軒端ゆ暮と笠　舍樓

沙爲針ゆ手ゝるハ糸ゆ風撥　仝

あ分たゝゆと七夜の花ゆ袂の袖　秀鏡

夕暮毎ゆ手ゝ爲ゆ　仝

うゝう沙里は扨秀鏡去ゝりゆ

金都の時雨殘楓を思ふ者ゝ

謝諧を閣ゝ行裝を催ふ月ゝ歌

仙一折ゝ爲ゝ者ゝ爲ゝ

通天雲葉ゆ西ゝ秀鏡得此字

松ゆ色ゝ也は多ゝ井の末ゝ葉　秀鏡

は雲や ちゝゆ二月は花見ゝ

老ハゝと葉も ゆ ゝ　丶

分爲爲爲さゝ西ちゝゆ葉　佳方

先年所ゝ有ゝ　舍樓

ちゝゆ爲ゝ爲ゝ爲ゝ爲ゝ爲

川をしたがへ山をあゆみ大坂川乃比眠足　秀鏡

日も西よりしの道の谷を山路哉　佳方

三夜泊りし京内川の垂下る　舎梓

走るく北の海雲あり

空の彩しらぬの輝く小川哉　丶

竜安寺にて

土橋や許さぬ磐ゆ水の音　神　佳方

予謂ありて故あるべしと

旅の日を惜しむ磐見をの哉　舎梓

生駒乃記

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月にかゝり雨にふり秋に菊よ
調子をもつて兄嫁といひと
りハ大根を法師として芸術
をまなひ次第まれ一つの道を
かたし能書ハ御扇をもとよ
りあらハ萬暦嘉靖乃筆の中よ
献大高千種其をとの勢
飛小野和訓の楊枝よりまた次
千鍾醍醐と詩せられハ君への
まこと深き事辟言へ無し歌の誹

諧河利継ぎ揮毫あり今ハ
さて慰ミ海の好ミて其名
をも師匠に継ぎ来たりおもむ
雅道に構ひ情の海さ無味
なるもの無しとも今ハあら
玉の道筆に揮毫を
もて海松よりたる試合をす
目ほどの借用をも指南して
時をもかたすみ松やの神に
依りて世に広め法園のちからとも存知

雖只頃之夢を覺すが如しあれの事は實に
夫れ人生の世に在るや月
の如く雲の如く水の如く泡の如しん

秀鏡
述